

Tóth Judit

*Test és Lélek: antropológia és értelmezés Nüsszai*

*Szent Gergely műveiben*

(トート・ユディット『肉体と霊魂——ニュッサの聖グレゴリオスの  
著作における人間論と解釈学——』)

Kairosz Kiadó, pp. 320, Budapest 2006, ISBN 963 9642 50 9, ISSN 1587-2599  
Catena Monográfiák 8., A/5, 3500 Ft.

秋 山 学

本書の著者トート・ユディット女史は、『ヘルマスの牧者』に関する研究で1997年に博士号を、2006年に本書により教授資格を取得され、現在デブレツェン大学人文学部のハンガリー文学文化研究所で比較文学を中心に講じておられる教父学者である。ご本人によれば、学位取得時は高等教育の制度が現行のものとは異なって簡便なものであったために、ニュッサのグレゴリオスに関する本書を自身の本格的な研究と位置づけたいご意向のようであった。評者は、本誌第48号にも紹介したハンガリー教父学協会大会での女史の口頭発表を何度か聞く機会に恵まれたが、実に美しいハンガリー語を話される方である(拙稿「研究動向 ハンガリーにおける教父学研究」、『中世思想研究』XLVIII, pp.166-170を参照)。また評者は同号に、シヨモシュ・ローベルト氏の著書を書評したが、本書はそれと同じ「カテナ・シリーズ」の第8巻ということになる。なお本書発刊後ほどなく出版された論文・書評集『終わりなき終末——黙示文学と聖人伝に関する論文・書評集——』(D. Tóth Judit, *Folyamatos vég: Tanulmányok és recenziók az apokaliptika és a szentek irodalmáról*, Kairosz Kiadó/Örökségünk Kiadó, pp. 208, Nyíregyháza 2007, ISBN 978 963 9694 03 3, A/5, 1840 Ft.) のなかに、第4論文として「正典化の過程における『ヘルマスの牧者』」が収録され、初出が1994年とあるため、これが彼女の学位論文の骨格であると思われる。

上掲の教父学協会の大会では、2001年（第1回）「ニュッサのグレゴリオス『モーセの生涯』における否定神学」、2002年（第2回）「グレゴリオス『マクリナの生涯』における〈哲学的生〉の諸要因」、2004年（第4回）「二分説か三分説か？ グレゴリオスの人間論における肉体・霊魂・思惟の關係」、2005年（第5回）「樂園はいずこに？ グレゴリオスの聖書釈義における墮罪の前・後でのエデンの園の場所」、2007年（第7回）「メレティオス司教の死に際してのヨハネス・クリュストモスとグレゴリオス」、2008年（第8回）「（グレゴリオス）『その時には、御子自身も』に関して』における論拠と理解」、そして2009年（第9回）「グレゴリオスの著作における聖書解釈者としてのパウロ」というように、一貫してニュッサのグレゴリオスに関する研究を精力的に発表しておられる。そしてこれらの口頭発表のいくつかが、本書のなかに組み込まれていることが理解される。彼女の研究の進め方を紹介する一助ともなれば幸いである。

本書は本論4部と付論1部の計5部により構成されている。「はしがき」と「序論」につづき、第I部は「〈教父たちの学園〉にて」と題され、1.「グレゴリオスの生涯とその著作の意義」および2.「人間論的問題設定」の2章より構成される。そして第2章はさらに①「人間論における肉体と霊魂の問題」、②「古代キリスト教時代における人間論の諸問題」、③「グレゴリオスにおける人間論的問題設定」の3節より成る。

第II部は「創造史における肉体と霊魂」と題され、1.「グレゴリオスによる人間論の出発点としての創造史」、2.「『人間創造論』における世界と人間創造」、3.「人間創造の理解における、人間論の基幹概念としての〈像〉（エイコーン）」、4.「『創世記』1:27の理解：二重創造説（人類の創造と、種による差異の付加）」、5.「創造史における肉体と霊魂」、6.「悪と罪の問題、霊の情動」の計6章より成る。このうち第1章は①「人間存在の枠組みとしての宇宙」、②「拡がり（diastéma）としての創造」の2節、第2章は①「『人間創造論』における世界の創造」、②「『人間創造論』における人間創造の理由」の2節、第3章は①「人間論の基幹概念としての〈像〉」、②「『創世記』1:26の釈義史に照らしての〈像〉と〈似姿〉の解釈」、③「〈像〉の内実：人間の本性」、④「〈像〉性の存在論的基礎：分有——神性・人性相互の対応：〈似たものは似たものを知る〉——」の4節よりそれぞれ成り、この第3章の第3節はさらに1)「〈本性〉の概念」、2)「人性」、3)「神性」の3項に分かれ、第4節はさらに「神性への分有の段階：存在の階

梯」という小項を含む。第5章は①「人間の二段階による創造」, ②「人間の肉体」, ③「人間の靈魂」の計3節より成り, この第5章の第2節は1)「人間の尊厳」, 2)「統治のために創造された人間」, 3)「肉体の生命の特質」, 同じく第3節は1)「靈魂の創造」, 2)「靈魂の諸部分ないし似像: 靈魂と思惟」, 3)「肉体における靈魂と思惟の働き: 靈魂の〈位置〉の問題」に分かたれる。第6章は①「墮罪, および罪に墮ちた状態」, ②「楽園はいずこに? グレゴリオスの聖書釈義における墮罪の前・後でのエデンの園の場所」, ③「墮罪の結果としての靈魂の情動」の計3節より成り, このうち第3節はさらに1)「理性と情動の関係」, 2)「靈魂の浄化」の2項目を含む。

第Ⅲ部は「死と復活における肉体と靈魂」と題され, 1. 「終末論」, 2. 「死における肉体と靈魂」, 3. 「復活論」, 4. 「〈万物の復興〉」(apokatastasis tón pantón)の計4章より成る。このうち第1章は①「教父の終末論」, ②「終末的事柄の一つとしての死——復活の希望の創造——」, ③「『靈魂と復活について』における靈魂論と復活論の関係」の計3節, 第2章は①「死後における靈魂の運命と本性」, ②「冥界の問題」の2節, 第3章は①「復活がもつ, キリスト教教義としての〈問題性〉」, ②「復活の諸論拠」, ③「復活の本質」, ④「肉体の復活——将来実現すべき像性としての復活の肉体——」, ⑤「復活の時」, ⑥「復活の時点における悪と審判」の計6節を含む。このうち第3章第2節は1)「聖書からの諸論拠」, 2)「聖書からの最も重要な論拠としてのキリストの復活」, 3)「復活に加えての理拠」の3項, また第4節は「ベルソナ論と人間の自己同一性」という小項目, 第6節は1)「審判と浄化」, 2)「罰の本性: 罰は永遠か?」の計2項を含む。そして第4章は①「アポカタスタシスという用語について」, ②「グレゴリオスの終末論における〈万物の復興〉」, ③「グレゴリオスの終末論における齟齬発言」の計3節を含み, このうち第1節は1)「オリゲネスの語彙用法」, 2)「グレゴリオスによる語彙用法」, 3)「オリゲネスとグレゴリオスの終末論におけるいくつかの相違点」, 第2節は1)「グレゴリオスにおける普遍主義の証拠」, 2)「論拠としての悪の本性」, 3)「終末論的復興における人間本性の普遍性」という下部項目を含む。

第Ⅳ部は「徳に満ちた生涯の規範」と題され, 1. 「徳: 神的本性への与かり」, 2. 「『マクリナの生涯』における〈哲学的生〉の諸要因」の計2章より成る。第2章は, 上掲した教父学協会2002年次大会での口頭発表の改訂版である旨が注

記されている。

第V部は「付論」と題され、1、「グレゴリオスと異教哲学の伝承」、2、「グレゴリオスの著作における解釈学と釈義」の2章より成る。このうち第2章は①「グレゴリオスの解釈学的基盤」、②「言語哲学的背景」、③「釈義における解釈学」、④「釈義における信と知」、⑤「信と信的神秘的文脈における理性的・概念的考察」、⑥「信に仕える修辞学」、⑦「信と隠喩的表現」の計7節より構成される。巻末には参考文献一覧とギリシア語彙へのハンガリー語訳語対応表が付されている。

ニュッサのグレゴリオス研究は、規範的校訂版の公刊や、教会教義の現代化などともあいまって、20世紀後半以降その進展が目ざましい。ハンガリーでも、同国教父学研究の中心的存在となった故ヴァニョー・ラースロー師の学位論文が『ニュッサのグレゴリオスの神学的人間論』（1972年）であった。同国教父学研究の本流に立つ本書は、特に『人間創造論』および『靈魂と復活について』という379/380年ごろの著作を、人間論というテーマから深く掘り下げた本格的な研究である。上に全体の概要を紹介したが、ここからも推察されるとおり、本書はこのテーマ設定の下に、『創世記』に記される〈像〉をめぐる理解、プラトン主義の受容、アポカタスタシス的終末論のはらむ射程、オリゲネスの終末論からの影響と差異、創造と罪・悪の問題、靈魂論の系譜、そして解釈学的諸問題など、およそグレゴリオス研究に関わりうる基幹テーマを包括的に取り上げている。『雅歌講話』や『モーセの生涯』など最晩年の観想的釈義著作を中心に据え、グレゴリオスの様々な視点がそのうちにいかに集約されているかというアプローチももちろん有効であり、好著もすでに数多く見られる。本書ではこれに対し、それに先立つ成熟期のグレゴリオスと彼の人間論を基盤に据えることで、よりダイナミックなグレゴリオス解釈を切り拓いている。またそれに伴って、アポカタスタシスや終末論といった観点がより十全に扱われる結果となり、かえってここから神学的な対話の場を提供しているとも言える。本書は、東西の研究の接点・融合点とも言えるハンガリー教父学の精華の一つとして、高く評価されるべき一書であろう。

---